2012 年度遊び士養成講座報告

「だがしや楽校が未来を救う」

主催：NPO 富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊
応援：北陸こども環境研究会

記録：早川隆志、富樫豊

1. はじめに

NPO 富山･ｲﾀｽﾞﾗ村･こども遊ばせ隊の定例行事「遊び士養成講座」の一環で「駄菓子屋は未来を救う」と題して講演会とワークショップを行った。概要は以下のとおりである。ただし、以下の文は編者の思いでまとめたものでありニアンスの違いはご容赦願いたい。

日時：2012 年 6 月 24 日（日）10:00-16:30
場所：富山県呉羽青少年自然の家
午前の部：10 時から 12 時まで
基調講演「だがしや楽校が未来を救う」
参加者 50 人、大人がほとんど
講師：松田道雄氏（東北工科芸術大学教授）
午後の部：13 時から 16 時 30 分まで
ワークショップ「だがしや楽校」　ブース開設：
紙芝居屋：飯田美智子氏、　剣玉屋：高木里穂氏
皿回し屋：平井氏、　こま回し屋：京角玉子氏
ギターソング屋：本多卓氏、　手仕事屋：坂東典子氏、
指ハブ作り屋：台蔵光子氏、　ｺﾝﾆｭｱｸ屋：吉本宏明氏、
駄菓子屋：沖田のおばあちゃん、
たぬきコーヒー・ケーキ屋：八田一弥氏、

2. 主旨

老いも若きも子ども一緒になった人間性に富んだ社会づくりをめざして、松田道雄氏がとなえる「だがしや楽校」の理念を学び実践をワークショップとして行うことにした。

講演の会場風景

3. 基調講演（午前の部）

(1)講演

講師の希望で参加者が単に講演を聴いて帰るのではなく皆さんどうしで話し合う場をつくりたいとのことで、まず聴衆の皆さんを 5-6 人でグループイングして 8 テーブルに分かれて着座いただいた。

講演では、まず、「なぜ駄菓子屋か」から話が進み、街づくりとして人とのかかわりの大事さを主張されていた。特に、「もの」も人を介在しているのであり、ものを介した人とのかかわり、ものとのかかわりがあるとして、大きな視野で取り組む姿勢の大事さを、種々の取り組み事例とともに力説されていた。以下に先生の講演内容を編者の記憶を頼りに列挙する。

講師の松田先生、アフリカ人の首飾りの説明中

まん前にて熱心に聴き行動する若者面々

●駄菓子屋論
・駄菓子屋は菓子屋ではなく駄がつく。これは若干軽蔑の意味があるものの、地域のコミュニケーションの要となっている。
●人とのかかわり、つながり
・参加者は聞いて帰るだけではなく自らも語る。それによって人がつながる。大事にしたいものである。
●ものとのかかわり、実は人とのつながり
・ものを作ることがとても大事だ。つくるからこそ創意工夫や遊び心が生まれる。都会ではものを金で買うので、創意工夫や遊びの必要がまったくなくなる。人間らしい生活がしにくくなるといえる。
・アフリカ人の首飾りについて；彼らはいろいろな方からもらったものに紐を通してぶら下げている。これは、人の思いをつなげたことになる。身につけて分かち合うというものである。人とのつながりの証である。
●素朴さが一番
・山葡萄あめは山形の特産品である。どのように個性を出すのか。単に甘くするなら、ぶどうの個性が出てこない個性が出るという素朴さを大事にしたいものである。
・小さい頃の遊び心は大事にしたいが、肝心の大人がそのこと

を認識せねばならない。

●分配することでもすべて人とのかかわり

・お菓子の分配について、例えば人数分より少ないお菓子があったとする。分配には、まずどう分配するか話し合いがあり、その結果お菓子を割りじゃんけんしたとしても再度話し合いをしている。すなわち、分配に際してコミュニケーションを図っている。そうしないと分配は不可である。今はそのような分配を通したコミュニケーションが少ない。分配ひとつにも思いやりといったような人のかかわりがあることを忘れてはならない。

・（講釈と前後して）実際にせんべいのようなお菓子が、テーブル毎に 5 人着座なら 2 個といったように配られた。皆さんでこの 2 個をどう 5 人に分配するかを考えた。皆さん、話し合いながらお菓子を分配というよりも分かち合っておられた。

●ものの意味

・東京にはものがない。デパートなどにのみもの（物）がある。物を買うのに話しをする必要はない。買い手は物に関する知識を頼りに買うのである。それではものの理解や人とのつながりは不十分であることはいうまでもない。

・地方には生産基盤がある。豊かさそのもの。そこには、ものを介した人とのつながりがある。

●あそびも関係づくりから

・遊びは段取りとともにある。次に何して遊ぼうかとかちょっとこんなことやってみようかということは遊びの段取りである。遊びは何もないところで、ものごとを作っていくようなものである。

・食事で口をあける、声が出る。歓談のはじまり。コミュニケーションはいつでもだれでもできるものなのである。

・子供のみではなく大人とともに、すべての人間の生活がある。子供だけ、あるいは大人だけ、といったことはありえないことは言うまでもない。

・感覚を若返させる。それには道徳を若干崩すことから始まる。それが遊び心というものである。（皆さん遊びましょう）

●地域での関係づくり

・地域での関係付けとして、各団体が各地域にかかわっている。そこで、地域を一つにしてそこに地域にかかわる団体、冒険遊び場やアートの場、駄菓子屋などが集まると、一つの有機的な町を作ることが出来る。そこでコラボレをしてもいいし、そうでなくても賑わう。

・各自店を持ち寄って集まれば、お話やものでも十分に盛り上がる。長野県で実施して成功している。静岡でもそうである。

●いろんなものが工夫次第で生きてくる

・子供には、いろんなものがあれば、それを遊びに変えていく。（そんな力を持っている）

・（自分は手芸教室を開催している。）　おばあちゃんの手芸教室では、参加者がお互いに材料や（お話を）持ち寄って編み物をして、遊びの感覚を取り戻すことにしている。

・おばちゃんのものづくり教室。ものがあれば何でも創意工夫でものを作っていく。たとえば、米袋（一俵）はかなり丈夫なものであるが、これをどう役立てるか、皆さんに考えてもらってものづくりをした。

・おばちゃんたちは編み物教室だから「講師（自分のこと）がもちろん編み物が出来ると思っていたのに」といっていた。しかし、講師は創意工夫をアシストするのであり、「編むのは皆さんです」といって教室を活気づかせた。

・何でも面白くためになるとして、世界地図のシャツをつり、雨で濡れても良いビニールバックも作った。

●店の捉え方

・店とは売るというよりも見せるもの。楽しくなければならない。多くの人が集まって関係をつくる。話が広がっていく。

(2)皆さんが考える「だがしや楽校」

「皆さんがかかわってやってみたいお店の案をホワイトボードに書いてください」と講師の発案により、各自が思い思いに店を書いた。最初から準備していたグループはそのまま書き、そうでない人もこんな店をと思いをこめていた。剣玉屋とか愚痴聞き屋など多彩なものが出た。（下写真黒板参照）

また、（富山県）小杉で実際に駄菓子屋を営んでおられ沖田さん親子（88 才のおばあさんと 60 才代の息子さん）が特別出演として来場され、駄菓子屋ひとすじの熱い思いを切々と語っておられた。皆さん、頭の下がる思いであった。

沖田のおばあちゃん親子、駄菓子や一筋

4. ワークショップ「だがしや楽校」（午後の部）

午前中はどちらかというと大人の方中心であったが、午後には、親子づれの参加者がたくさんみえられ、「だがしや楽校」実践ブースにて食と遊びとものづくりを大いに楽しんだ。また、高校生が 5 人も参加していただき、学業の他にもこんな楽しいことがあるんだということを実感しておられた。以下に、そのときの様子について写真を交えながら簡単に紹介する。

なお、本ワークショップは、皆さんで楽しむ関係づくりの実践そのものであった。

ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ 会場に一同集合

（1）　剣玉屋：高木里穂氏

剣玉とは無縁な方々が、インストラクターから指導を受けて「剣玉は膝」を念じながら練習に励んでいた。とはいえ、指導どおりにトライするもうまくいかず、うまくいったときは拍手喝さいであった。また、インストラクターのデモには、皆さん感心するばかりであった。

何べんもトライして成功ー!!

（2）　皿回し屋：平井氏

どちらかといえば通の方が集まったためか、お互いにデモも演じているかのようであった。そうした光景を見ると、皿回しは今やなくてはならないポピュラーなものとなったといえる

どう、うまいもんでしょう、って

（3）　こま回し屋：京角玉子氏

扱うコマは一般のコマとベーゴマ（円錐形形状のボタンのようなもの）の二種類であり、喧嘩コマ（丸いボールの中に各自のコマを入れて相手のコマを弾き飛ばして競うもの）を楽しむものであった。参加者はコマとはほとんど疎遠な方々ばかりで喧嘩どころではなく、インストラクターから指導を受けながら回すのに必死であった。コマがうまく回ったときは会場は拍手に包まれていた。

こうやるんです、って、さすが

（4）　ギターソング屋：本多卓氏、

ギターソングや：ひとり、黙々と弾き語っていた。その響きは子供の声にかき消されそうになる割には会場に静かにいきわたり、皆さんには心地よいバックグランドミュージックとなった。すいません、写真なし。

（5）　手仕事屋：坂東典子

刺繍や編み物、それにちょっとしたアップリケのデザインなど、手で出来る仕事を皆さんと楽しみたいとして、店が構えられた。ちょっとしたものでも店で買うことが多い昨今、参加者はそうしたものに手作りによって自分の思いが込められるとあって励んでおられ、また皆さんどうしで談笑しながら楽しさを満喫されていた。

皆さん、熱心に手仕事に励んでます

（6）　駄菓子屋：沖田のおばあちゃん

駄菓子屋を営んでいる特別ゲストの沖田おばあちゃんがこの機会に皆さんに駄菓子屋の良さを知っていただきたいとして参上され、参加の親子さんたちと駄菓子がとりもつ縁を味わいながら楽しんでいた。子ども達は「これなあに、あれなあに」といって小さな発見を繰り返しながら食を堪能するとあって、大変な盛り上がりをみせた。駄菓子の底力を感じた次第であった。

おばあちゃん、駄菓子やスタンバイ

子供が大喜び、大人も

（7）　コンニャク屋：吉本宏明氏、

富山では「あんばやし」といわれ、おでんの類のものである。コンニャクを底辺 2cm、高さ 3cm、厚さ 0.5cm くらいに切って三角形の片一個をくしに刺して煮えた味噌につけて食べるものである。皆さん、富山ならではの美味しさに舌鼓をしていた。

コンニャク屋の一家です、よろちくって

（8）　たぬきコーヒー・ケーキ屋：八田一弥氏、

コーヒー豆をタヌキにたべさせて糞から未消化の豆を取り出して焙煎するものであったためか、始めのうちは気持ち悪さもあったが、これが以外に美味しく、皆さん自家製のケーキと共にコーヒーの香りを楽しんだ。

松田先生もおしくいただいておられまーす

（9）　指ハブ作り屋：台蔵光子氏

ハブ作り名人の指導を受けて、家族連れが指ハブづくりに挑戦した。作った指ハブをさっそく使って、親子で楽しんでいた。一度食いつくととれない、そこでお互い手をしっかりと握って。ハンドツーハンドのコミュニケーションを楽しんでいるかのようであった。文字通り、ものと人をつなげていた。

ぼく、しっかりおぼえてね、親子でがんばる

（１０）紙芝居屋；飯田美智子氏

今回は、紙芝居の絵を観客が見て彼らにも語らせてストーリーを皆で楽しむものであり、皆さん、大いに楽しんでいた。たとえば、蛇の絵を見て、「長いものなあに」と問いかければ、小どもたちは〇〇といって応答し、ストーリーに入り込み楽しんでいた。

こどもはくぎづけ、紙芝居おばちゃんがんばる

５．おわりに

皆さん、ワークショップを楽しんだ後、各ブースの方から感想をいただいた。いくつか紹介すると、いろんなことに気づかされたとか、簡単なことでも教わる楽しさとか、お金を取って業を営むのが初めてなので緊張もしプロ意識を感じたとか。

これを受けて講師松田先生からは「こうした取り組みは今ここだけでしたが、もっと人の集まる所でやりましょう」と会を締めくくった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

北陸こども環境研究会定例セミナー（12 年度第1回）

日時；2012 年 6 月 24 日（日）18 時～21 時
会場：喫茶店ロニアンにて（富山教育文化会館裏）
参加者；10 人

表記企画の懇親会を兼ねて定例セミナーを行った。今回は、各自自由に話題を提供しながら、若い学生が二人も入いり、大いに盛り上がった。以下に報告する。なお発言者の名前は伏せた。

お酒も入り議論白熱、盛り上がってま――す

◆討議 あちらこちらで種々の問題について自然発生的に熱い討議があった。このうちいくつかのを列挙する。

（1）教育について：

・子供が大卒の後、就職せずに何年も放浪している時の親の心構えや、近年学校のクラスで浮いてしまう子供たちの性質など…、話しできた。

・「ひとり一芸主義でこれからはいきましょう」という教育の話。高校生のときから、大学にかけて、その子どもの特性を生かした仕事を早いうちから修業させ、大学を卒業するころには、レベルの高い職人になる。そういう職人がこれからの日本を元気に明るくする。

・高校ではゼミ授業ってのをやっていて、生徒が好きなことを継続的に挑戦させてます。そのゼミ授業を、将来の仕事に結ぶことができたら、きっと面白いだろう、と。

・具体的な職業として「調香師」。匂いのソムリエっていいますか。これを本職にしている人は少ないそうですが、だいたいは専門学校を卒業して、どこかのお店で修行してようやく一人前になるそうです。だけど、高校生のうちから勉強を始め、大学でも継続して勉強したら、若くしてすでに一人前の人間を作ることができるはずだ、と思います。

（2）精神病理について

心理的なことをベースにした病理的なアプローチやカウンセラーについて、その危険性が二点論じられた。

第一には、人の心の病は経済優先の社会の制度や貧困などが関連したものであるので、心理学的アプローチだけで対処することはできない。

第二には、精神病の医師は投薬のやり放題である。何か違うのではないのか。参加者の一人から、蚊ぶん症（蚊がらちらと飛んでいるように見える病気）の方が、投薬にたよらず健全な生活を送っていたら症状が治まった、という話もあった。

（3）コミュニテイについて

・コミュニテイ構築には、子共も当然ながら、大人も一緒に関わることが大事ということで皆さん考えが一致した。

・シルバー爺さんの活躍の場として、コミュニテイとしてご隠居さんがいるような町を作りたい。

・遊びの力について学会でもあまり論議されておりません。遊び力についての講演には皿回しを盛り込んで、これからも頑張ります。

◆ 提言・提案

今、皿まわしについて、教育効果を狙って早川さんが売り歩いているが、皿回しの皿や回し用の棒について、売れるよう工夫するなら、もっと楽しくそれこそ文化まで持っていけし、また若い方々を雇用することも出来る。

皿そのものをインテリアエレメントになるようにとか、皿の絵柄をデザインするのも必要であり、これを事業化して今日企画を手伝っていた若い方々の雇用を確保する、といった具体的な話が出た。

そこで、遊具メーカーや材料メーカーとタッグを組んで、アートなオリジナルのお皿開発をめざして、皿の事業化研究会の立ち上げることになった。

◆感想

・話を聞いていて目からうろこと言うか、思いつかないような視点をたくさんもらうことができて楽しかったです。

・若い方を型にはめようという話でなく、ありのままにしゃべれてよかった。（若い方の感想）

◆おわりに

会場は昔からのレストラン＆カフェー、イタリアンスパゲテイとビールで大いに盛り上がった。特にスパゲッテイは昔ながらの味で、今口にすることは出来ない。こうした味がなぜ入らないのか、議論が弾んだ。近代はそうしたことを忘れている、といったようなことでしめくくり閉会とした。